

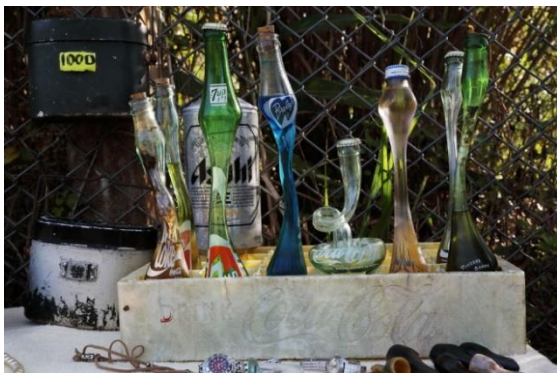
# The Gallery voice NO-67

編集・発行／ 画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 番地／TEL (098)888-6117 / 2022.11.12  
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa Japan www.galleryokinawa.com

## Patchwork Okinawa 50

豊里 友行

私にとって写真は、モニュメントだ。2012年の画廊沖縄の『復帰40年企画・依存 - Independent』に対して、写真家としての私なりの思い(ウムイ)から「豊里友行展 - 白い地図 -」を開催した。その際に寄せた文章「ウムイヌ花」で私の写真は、モニュメントとしての覚悟だった。それは、本来あるべきコカ・コーラやペプシなどの瓶の容姿を溶解させて売りに出されていたフリーマーケットの風景にも見出されていく。



「溶解」(沖縄市・2021年)

当時の私は文学青年でもあり、宮沢賢治の『よだかの星』に傾倒する。その主人公のように、この身を焼き尽くそうとも、夢みて輝く星になるのを沖縄のためなら自己を犠牲にしても写真のモニュメントを打ち建てようと陶醉していた私と重なる。

「私は、沖縄戦や基地について撮ろうとするとき心の底から鈍い痛みが込み上げてくる。どんなに沖縄戦でクルサレてもブチクンされても、祖母の涙が教えてくれた“戦はいけない”というウムイをニュートラルな感情にできるには、私の血がたぎってしまい、言い様のない感情が咆哮をあげ、邪魔をする。」(豊里友行写真集『辺野古』2014年刊・沖縄書房より)

2022年「復帰50年」の企画に、画廊沖縄から展示会のお声かけをいただいた。あの「白い地図」からこの10年、相変わらず右往左往して笑ったり泣いたり怒ったりしながら写真家として撮り続け

た写真たちが、写真集の中に思いを込めて収められている。私の俳句集と写真集を合計すると23冊に及ぶ。それは私の写真家としての道のり、沖縄での1995年から2022年までの写真のモニュメントであり、さまざまな出会いという財産に、私の成長は促されてきた。

私たちの沖縄は、自己犠牲も含めて誰の犠牲のもとに平和が成り立つというのだろうか。

1995年の少女暴行事件のショックから歯を食い縛って撮り続けた私の夢は、裏通りの盛り場にある花笠の裸婦像が横たわる壁面に書きなぐられた落書きや顔や裸体に貼られた無数のステッカー・シールを活写する私に変容している。本当は、こんな沖縄を撮りたいんじゃない。それでも沖縄の不条理をコード化させないために必要な写真モニュメントがそこにはあった。その写真のモニュメントたちは、私自身の投影なのだ。女性たちや子どもたちを生贄のように沖縄の不条理に喰い散らかされるこの沖縄(うちなー)よ。

私は、2004年から撮り続けている辺野古通いの中で警察や機動隊に排除されながらも座り込む、沖縄御万人(うちなーうまんちゅ)から、遅くも優しい、非暴力の人間の強さを学ぶ。辺野古の海に土砂が投入され日本国家は、既成事実として海を埋め殺し続けている。激戦地の死者たちが眠る大地さえ、えぐり取って辺野古の海を埋めようとする日本国家とは何なのか。日本やアメリカに踏み躪られて歪んだ日本の中の沖縄が容姿をひずませる。



「祈る手」(糸満市・2022年6月23日)

それでも私は、しなやかに日の光も月の光も吸い込んで光り輝く星のようなモニュメントを提示し続けたい。

(とよざと ともゆき/写真家)

## 愛憎入り混じる ウチナーンチュのアメリカ

平川 信幸

2022年11月、沖縄の日本復帰から50年の年が終わろうとしている。当事者不在、そんな印象をもった一年であった。

私たちは歴史的な出来事を結果だけを見て評価してしまう。普段、教科書で見る年表は一本の線になっている。それはあたかもテスト問題の回答のように歴史的な出来事の結果だけが記されている。そして年表を見るものは、文字によって表された出来事を採点者のような眼差しで見えていく。しかし、歴史的な出来事はそんな単純な点や線ではない。そこに至るまでに、いくつもの選択肢があり、それを選び、あるいは選ばざるを得ないような状況がある。こうした状況を積み重ねた結果として、年表の線上に歴史的な出来事として記される。沖縄の日本復帰は最初から回答（結論）が用意されていたわけではない。幾つもある選択肢の中から、沖縄の人々が自ら選んだ結果なのだ。復帰の当事者とは、こうした選択を重ねてきた人々だ。そして、沖縄戦の戦禍を起源とし、今なおアメリカ統治の影響をひきずりながら生きている人々も当事者だ。最後に、こうした人々の思いに寄り添い、沖縄の現実に向き合うものも、その記憶を受けつぐ当事者なのだ。



「軍用地と蟋蟀」(沖縄市・2018年)

人々の思いに寄り添い沖縄の現実に向き合う写真家に豊里友行がいる。1976年生まれの豊里は、いわゆる失われた世代に属する。沖縄の現代史を考えた場合、1970年代生まれは、また異なる意味

をもっている。沖縄戦からアメリカ統治、復帰運動の記憶を次の世代へつなげていく、バトンの世代だ。この世代の祖父母は戦争を経験し、父母はアメリカ統治時代に育ち、成人して復帰を迎えている。筆者も豊里と同じ1976年生まれだが、小学校で沖縄戦を経験した教員が担任になり、中学でコザ騒動の話を受業中に聞いた。沖縄戦と戦後の記憶を日常の一部として共有できたのである。



「コカ・コーラ」(沖縄市・2020年)

そして、もう一つ、豊里の活動を考える場合、出身地であり活動の拠点となっているコザという地域を外して語ることはできないだろう。アメリカ統治時代の痕跡が色濃く残るこの街は沖縄の戦後を象徴する場所だ。戦後、沖縄とアメリカの関係は単純な二項対立ではない。通常、アメリカ人はよき隣人であり、時には大切な家族になったりする。その一方で日常を簡単に覆す恐るべき存在でもある。愛憎入り混じるウチナーンチュのアメリカへの複雑な感情が、コザの街の深部に刻まれている。豊里の写真には、こうした目を凝らさなければ見えない複雑な感情が写し出される。

画廊沖縄で開催される〈Patchwork Okinawa 50〉では街のショウウィンドウと基地のフェンス、さらには大宜味のウンガミが共存する。一見するととりとめのない写真には、豊里が丁寧に向き合った沖縄の現実、点や線ではあらかずことのない人々の記憶の断片が掲示されているのだ。復帰50年、この展示会は沖縄の現状を示す一つのエポックとなりえるだろう。

(ひらかわ のぶゆき/沖縄県立芸術大学芸術文化  
研究所共同研究員)



## うちな一の写真ぬじゃー 豊里友行

THE Gallery Voice No-67.2022.11.12 画廊沖縄

仲嶺絵里奈

沖縄復帰から50年の節目に、写真家豊里友行の展覧会を開催すると聞き、これまで写真集で豊里の写真を見てきたが、プリントを見る機会が少なかった為、期待が膨らんだ。

今回、豊里と画廊沖縄の田原美野が「沖縄」について対話を重ねる中、着想に至ったという一つのキーワードが「パッチワーク」だ。「パッチワーク」とは様々な布地を接ぎ合わせて一枚の布を作り上げる手芸品である。1976年生まれで復帰前の沖縄を知らずに育った豊里がこれまで撮影してきた様々な沖縄の姿を、50点の写真のピースで紡ぐことでどの様な沖縄の姿が立ち上がってくるのか。辺野古の埋め立てや基地建設に伴う土砂採掘が引き起こす環境破壊等、つぎはぎだらけの戦後沖縄の現状が重なり、時、モノ、人、場所が、複雑なレイヤーを生み出していた。



「ジュゴンの折り紙」(名護市辺野古・2016年)

豊里は、写真家となってから一貫して沖縄戦に派生する様々な社会問題について目を向けているがそれは1995年の米兵による少女暴行事件で感じた虚しさをきっかけに、傍観者としてではなく、今という視点から沖縄戦と向き合おうと考えるようになった為である。少女の暴行事件で「言葉への絶望」を感じた豊里は写真表現の世界を選び、また、土門拳の写真集『ヒロシマ』との出会いが豊里を写真家の道へ目指させた。上京し写真の専門学校で樋口健二に師事し、2年間東京で過ごす。1999年、国境なき医師団専属のカメラマンに応募し、最終選考まで残ったが、面接で自然と語っていたのは、沖縄を撮り続けるという意思表示であった。その出来事が、後に淡々と沖縄を撮り続ける決心、覚悟に繋がったという。帰郷後は沖縄戦激戦地の糸満市で遺骨収集現場を取材し、米軍基地から派生する事件や出来事、基地のある街に暮らす人々の姿や返還された跡地を撮り続けている。

名護市辺野古への米軍基地移設問題の取材時には、辺野古へ通うのではなくアパートを借り、取り組んだ。少しの変化も見逃さないという問題に取り組む姿勢、強い決意が感じられる。豊里のように基地をドキュメンタリーフォトで表現する沖縄の写真家は、復帰前後の沖縄を知る者に限られている。豊里は沖縄の同世代の写真家たちとは違う目線で活動するが、それがかえって豊里という写真家の存在意義を高くする。眼の前に起こるその出来事を不器用なまでに撮り続けるその姿勢は、95年の少女暴行事件から変わることはない。

ドキュメンタリーの手法をもって沖縄のリアルな現状を収めてきた豊里が今回挑戦したのは、それに偏らない様々な沖縄の姿を表現することであった。豊里のイメージを一新するカラー写真で、街角やそこに息づく人々、取材の際に写した植物や風景といったスナップショットが中心となっている。ハーリーや市場、海の写真などからは、日常にある沖縄の風景や年中行事を通して沖縄が表現されている。しかし中には、米軍基地の存在や沖縄戦を想起する写真も含まれる。接写されたバラの背景には平和の礎の一部が写され、街角のショーウィンドーのガラスには基地の風景が重なる。俳人としても活動している豊里の鋭い視点が反映されているようだった。更に写真には、これまで取り組んだモノクロのドキュメンタリーフォトが混ざりこむ。50点の写真のシーケンスは田原によるもので、見る者の意表を突くような構成であり、最後は写真家豊里の根底にある、遺骨収集現場のモノクロ写真で締め括った。



「不発弾」(糸満市・2013年)

豊里の沖縄への眼差しからは、沖縄戦や米軍統治時代、復帰後から現在に至る沖縄の人々や土地の持つ記憶や歴史をどの様に次世代へと繋いでいけるかを問われているようだった。「うちな一の写真ぬじゃー(沖縄の写真家)」である豊里は真面目に「写真」する写真家であり、沖縄にとっての存在意義をあらためて考えさせられた。

(なかみね えりな/沖縄県立芸術大学非常勤講師)



コザ銀天街の豊里友行写真事務所にて・2022年10月

## Patchwork Okinawa 50+1 私たちの沖縄にむけて

田原美野

「私は1976年に沖縄で生まれ、沖縄で育った。そして20代のはじめから、約20年間、沖縄の写真を撮り続けている。撮っているのは、沖縄戦、そして米軍や自衛隊の基地に関係する人、モノ、場所が多い。そうせずにはいられない、という気持ちがある。」(『沖縄にどう向き合うか』・2022年新日本出版)

自身を語る言葉の通り、豊里友行は、戦後77年経った今も「戦争の後」を生かされる沖縄を、丁寧に撮り集めてきた写真家、だと認識していた。ガマに眠る骨や遺品の声を聴く遺骨収集者。沖縄の陸や海で日々、抗いを続ける人々の叫び。そのような過酷な場所に分け入り、写真におさめ、次々と写真集を出版する豊里の行為に、同世代ながら何故そこまでするのか、何が彼をそうさせるのか、不透明だった。さらに、豊里の写真に時折写り込む、異質なもののへも興味がわき、対話が始まった。

今展において、豊里が提示した写真には、実に様々な顔の沖縄が映し出されている。海でマリネレジャーや飛び込みをしてはしゃぐ少年たち。澄み渡る真っ青な空とソテツの葉の間から差し込む強い日差し。ハロウィンの仮装を楽しむ少女や水槽の中のクリスマスツリーと雪だるま。これまで豊里が撮ってきたものとは違う目線を感じ、聞いてみた。豊里は言う。

「それも沖縄。ありのまま撮る」

自らの写真行為を「記録表現」と言う豊里。「ありのまま」に撮ることは、その瞬間被写体に反応し、活写した豊里の「記録」ではあるものの、自分の想いとは相反するものが、写ってしまうこともあるという。それでも、その一瞬を残すことにこだわる。「沖縄が沖縄の未来を眼差すために必要なもの」と話した。

その愚直なまでの写真行為によって撮られた、一片一片は、豊里にとって等価である。そしてその集積から、これまで多くの先人や先輩たちによって語られてきた、知っているはずの沖縄ではなく、沖縄戦もアメリカ世も経験していない世代の、今を生きる写真家によって描かれた沖縄が、ありありと浮かび上がる。

つぎはぎの布は、一枚の布よりずっと強いという。沖縄の人々が一つ一つ刻んできた尊い時間。その時間を手渡され、継いでいく私たちは今後どのような沖縄を作っていけるだろう。静かな空や美しい海、豊かな森を育む土や安全な水、そして心穏やかに過ごせるウチナーを、後世へとつないでいけるだろうか。豊里の描いたパッチワークを前にとともに考え、51片目の島の姿を想像してみたい。

(たはらみの / 画廊沖縄スタッフ)



「断層」(宜野湾市・2021年)

### 【豊里友行 写真略歴】

- 1976年 沖縄市生まれ
- 1999年 日本写真芸術専門学校卒業
- 2005年 「辺野古」豊里友行写真展(県内の市役所等を巡回)
- 2009年 「東京ベクトル」(中部写真館ギャラリー)  
「彫刻家金城実の世界」(南風原文化センター)
- 2010年 「沖縄1999-2010」(久茂地公民館)
- 2011年 「沖縄桜」(ヒラカワ洋菓子店ギャラリー)
- 2012年 豊里友行展- 白い地図 - (画廊沖縄)
- 2017年 「オキナワンプルー 抗う海と集魂の唄」(未来社・2015)  
で、さがみはら写真新人奨励賞受賞
- 2022年 豊里友行展- Patchwork Okinawa 50- (画廊沖縄)